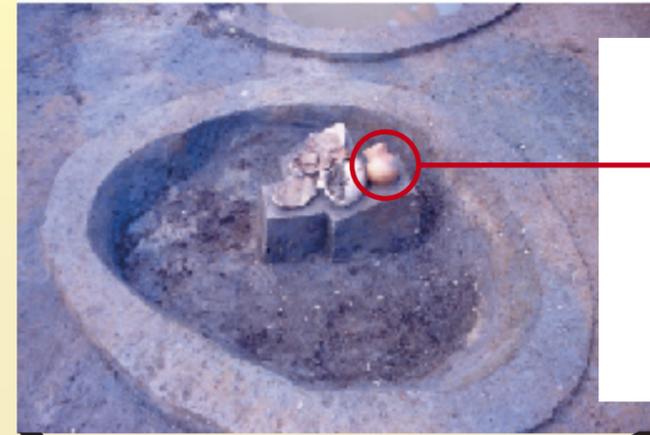


# 古墳時代から戦国時代の調査成果

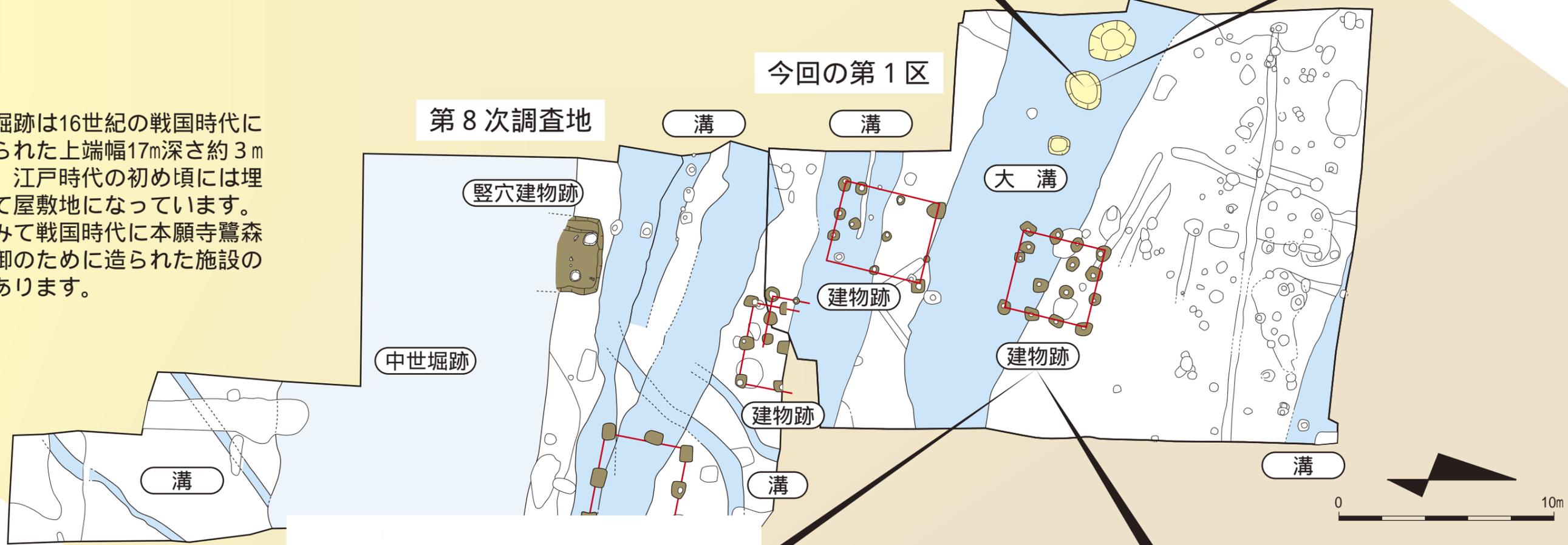
鷲ノ森遺跡の古墳時代から飛鳥時代にかけての生活面は、地表下2.5mの標高約1.0mの深さでみつかりました。古墳時代前期(4世紀頃)の段階で東西方向に延びる幅4~5mの大溝や同じ方向性の溝を多数確認し、地形の傾斜に沿った方向性で溝が掘削されていたことがわかりました。これらの溝が埋没した後、古墳時代後期(6世紀頃)になって土器を埋めた土坑などがみつき、生活の場へと移り変わっていったとみられます。古墳時代後期末から飛鳥時代(7世紀頃)にかけて総柱の掘立柱建物や竪穴建物が造られ、倉庫群と居住した家が立ち並ぶようになったものと考えられます。これらの建物は真北からやや東に軸をとる同じ方向性で造られています。

古墳時代の土師器壺・甕の出土状況

出土した土師器壺



中世の堀跡は16世紀の戦国時代になって掘られた上端幅17m深さ約3mの規模で、江戸時代の初め頃には埋め戻されて屋敷地になっています。状況からみて戦国時代に本願寺鷲森御坊の防御のために造られた施設の可能性があります。



堀跡の近くで出土した備前焼大甕



古墳時代の滑石製勾玉・白玉



飛鳥時代頃の掘立柱建物跡



古墳~奈良時代の須恵器